

剣風



事務局 〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
<http://www.saitama-kendo.or.jp>
(編集責任者 川合育三)

第16号 令和2(2020)年2月1日発行

(題字 元会長 野澤 治雄)



企業と剣道

伊田テクノス株式会社 代表取締役社長 檜崎 亘
(剣道教士七段)

昨年2019年3月2日、弊社剣道部として創部以来念願であった全日本実業団大会において女子剣道部が初優勝を飾ることができました。弊社剣道部の歴史は、弊社会長の伊田登喜三郎が現館長である「明德館」からすべてが始まっています。その歴史は明德館の前身となる松山尚武館にさかのぼります。松山尚武館は、昭和23年弊社2代目社長の伊田勘三郎（国士館専門学校出身）が戦後GHQによりまだ武道禁止令が出ていた時代、地元の剣道の復活を願い開いた道場です。その後、昭和34年に檜崎正彦先生が入社したことを契機に発展、昭和46年に『青少年研修道場明德館』と名称変更、昭和62年に弊社本社よりほど近い場所に移転しました。会社にも昭和50年代から檜崎先生を慕い、埼玉県出身の剣道経験者で地元で働きたいと入社する者が増え、平成元年(株)伊田組剣道部（当時）として本格的に始動。関東、全日本実業団大会に参加するようになり、平成7年の関東実業団大会3位入賞を皮切りに平成9、19、22年には関東実業団大会で3度優勝、平成9、27年には全日本実業団大会において2度の準優勝、個人においても全日本実業団高壮年大会において3名の優勝をはじめ、多くの実績を残しています。創部当時は男子のみでしたが、平成27年志藤綾子の入社をきっかけに女子剣道部が発足し、現在では伊田雄二郎剣道部部長（東和アークス(株)社長）をはじめ総勢43名の部員を擁した大所帯となっています。

そんな中、私は平成30年7月に伊田テクノス株式会社4代目の社長に就任いたしました。弊社は明治43年に創業し今年創業110周年を迎えた総合建設会社です。微力ながら企業経営に携わる立場となり試行錯誤を繰り返しているところですが、今回「剣風」への寄稿の機会をいただき、改めて企業における剣道の在り方について考える機会を得ることができました。

昨今、我々建設業界にも他業界同様「働き方改革」の波が押し寄せており、事業の安定拡大はもちろん、働き甲斐による社員のモチベーション向上や人材の獲得と育成、SDGsをはじめ企業価値を高めるコンテンツの実行などやるべきことが山積しています。そうした中での全日本実業団大会優勝は当社にとっても歴史的な出来事であり、何より日本一とうたえる事が会社にできたことは、全社員の誇りや希望につながったと考えています。当社は実業団といえども剣道のために勤務時間や勤務体系を配慮することはなく、当たり前ですがあくまでも仕事優先です。剣道部員の意識としても、剣道部以外の社員の方々から剣道部だからといって優遇されていると思われるようではいけない、業務において剣道部だからと言って特別扱いされるのは本意ではないとし、社内ではあまり剣道については大きくアピールしてきませんでした。しかし、私が就任直後に実施した社内アンケートにおいて、「なぜもっと剣道部を会社としてアピールしないんだ」というような意見が多く寄せられ、これは剣

道部の存在が社内でも大きく認知されてきた証拠だと確信し、社内外に剣道部の活動や実績を出して
いこうということになりました。先日も地元商工会主催のイベントで「日本一の女性剣士によるは
じめの剣道」と題し、全日本実業団大会優勝メンバーが市内の剣道未経験児童による体験教室を実施
したり、一昨年にはボランティア活動として岡山県倉敷市の豪雨災害により被災された少年少女剣士
に竹刀と木刀を寄贈したりと、企業として剣道を通じた社会貢献を実行してきました。また明德館と
しても毎年1月に比企地域の小学生から一般までを対象に約300名が参加する剣道講習会を開催して
います。こうした取り組みや各大会での活躍が相乗効果を生み、会社のイメージアップ、そして全社
員の意識の高揚につながると考えています。そして私自身もそうでしたが、社員である部員が剣道
を通じて得られる様々な要素を日常の業務において活かすことができます。また当社は「報徳思想」を
企業理念に据えており、剣道精神と相まって当社の企業風土を形成してきたとも言えます。今後も
各種大会における活躍はもちろん企業としての剣道のあり方についての検証を継続し、社業、地域
の発展に貢献し続けたいと考えています。

結びに今回このような機会をいただいたことに感謝すると共に、公益財団法人埼玉県剣道連盟の
益々のご発展と会員皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

令和元年後期大会記録

◆県民総合スポーツ大会兼県中学新人大会（11月11、12日：埼玉県立武道館）

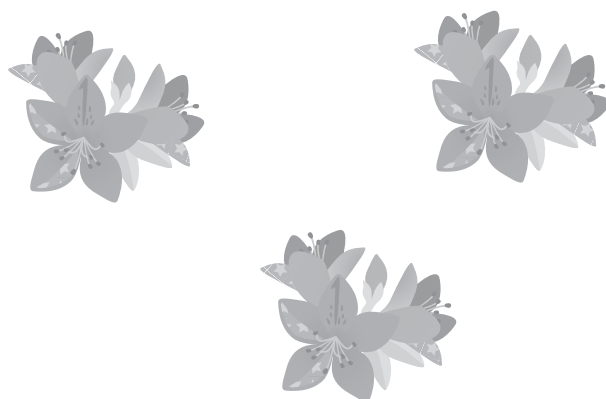
- ▽男子団体 ①加須大利根 ②秩父二 ③本庄一 ③川越大東
- ▽男子個人 ①倉田大翼（越谷栄進） ②増淵（本庄一） ③鈴木（加須大利根） ③中村（城北埼玉）
- ▽女子団体 ①春日部大沼 ②本庄一 ③さいたま泰平 ③朝霞二
- ▽女子個人 ①森柚乃（本庄一） ②松井（春日部大沼） ③石川（同） ③美濃島（さいたま泰平）

◆県民総合スポーツ大会兼県高校新人大会（1月25、26日：埼玉県立武道館）

- ▽男子団体 ①立教新座（岡本、高橋、山口、安村、北野） ②山村学園 ③本庄一 ③春日部
- ▽女子団体 ①星野（白川、菅澤、市川、矢萩、阿藪） ②淑徳与野 ③埼玉栄 ③本庄一

◆第63回全日本都道府県対抗県予選（2月23日：埼玉県立武道館）

- ▽次鋒の部 ①泉英太（北本） ②佐々木（大学）
- ▽五勝の部 ①小林竜也（北本） ②伊藤（東松山）
- ▽中堅の部 ①小野秀樹（高校） ②相川（同）
- ▽3将の部 ①足立柳次（警察） ②益子（同）
- ▽副将の部 ①橋本桂一（東松山） ②内田（同）
- ▽大将の部 ①井口清（警察） ②菊地（同）
- ※先鋒 金田玲旺（埼玉栄高）、監督 齋藤茂樹





昭和50年（1975）に成文化された「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という剣道の理念にある「人間形成」は、小手・面・胴・突という打突部位を打ち合う競技技術の錬磨を通して「無心」へといざなう心の在り方をも学ぶ方法として位置づけられ現代に至っている。競技技術は1822年に千葉周作（1793-1856）が開いた北辰一刀流の流れを汲み、精神的には周作の孫弟子にあたる山岡鉄舟による無刀流の系譜上にあるといつてよい。

その千葉周作らをして、奇抜な実戦的剣法で防御対策に苦心たらしめた流派がある。江戸時代の後半、葛飾郡惣新田村九郎兵衛新田（現・埼玉県幸手市惣新田）の吉野家に生まれた岡田惣右衛門奇良（よりよし、1765-1826）によって創始された柳剛流である。「りゅうごうりゅう」ではなく「りゅうこうりゅう」と読む。防具を着用し「しない（撓い・竹刀）」でお互いに思いっきり打ち合う「撃剣」が定着し始めた当時の気風を受け、新たな実戦を想定した流儀である。

三重県多気郡に残された奉納額の文面によると、技法の特徴は「斬足之法」「身体四肢無一所不斬突也」「棄剣手促以決勝敗」の3点。まず「脛打ち」があり、打突部位に囚われることなく相手の体のどこでも斬撃し、場合によっては剣を捨て素手で勝敗を決める。防御のために脛当てを着用し、戦国時代さながらの総合格闘技の形態をとる実戦に徹した剣術だったのである。

さらに、「免許」を取得するために7段階ほど経なければならなかった当時の形式を破り、他流に先がけ相伝形式を3段階ほどに簡素化。そのため、門戸を叩いた多くの若き入門者に早く免許皆伝を取得させ、彼らは「一家ノ隆旗ヲタテ」ようと関東一円のみならず各地に一家をなし、短期間に流勢の拡大を可能にした。1856年に開設された幕府講武所の剣術師範を輩出するまでに成長し、明治21年（1888）に関東一円の剣術家を紹介した『皇国英名録』には、隆盛を誇った神道無念流（615名）に次いで柳剛流の剣士385名が記載されている。

このように、他流派には見られない脛打ち打法と合理的な免許皆伝制度をもち、当時は異端呼ばわりされた柳剛流が爆発的に普及した理由はどのようなものだったのか。これを明らかにすることで、逆に18世紀の前半に防具を着用し「しない」で自由に打ち合う竹刀打込稽古を開始した直心影流、それを発展させた中西派一刀流、さらに打突部位を決め技の体系化を図り現代剣道の祖型を築き上げた北辰一刀流がなぜ脛を打突部位にしなかったのか、その理由も見えてくるのではなかろうか。さらに、そこに込められた剣の理法への思いまでも。

遡ること江戸時代の初期、戦国時代に終止符を打ち平和な時代の到来を見越した徳川家康（1543-1616）は、剣術を武士としての矜持と資質を伝承するための帝王学のようなものとして位置づけ、殺傷術としての武術から戦闘で身につけた叡智を伝える芸道へと変質させた。その体系を整えたのは、徳川家のお家流として採用された柳生新陰流と小野派一刀流であり、最近の古流研究によれば、これらの流儀は「合掌の姿」を理念とする剣技の体系を4代にわたって工夫し「勢法・組太刀」（かた）として伝承のシステムを構築したという。

江戸中期になると五代将軍徳川綱吉（1646-1709）により武家諸法度が「文武弓馬ノ道、専ラ相嗜ムヘキ事」から「文武忠孝を励まし、礼儀を正すべき事」と改訂され、本来の剣術が如何にあるべきかが問われることになり、武芸のあるべき姿を問う観念が先行し、実用からの乖離現象が生じ「かた」の形骸化が進行。その後、八代将軍徳川吉宗（1684-1751）は文武奨励と庶民教化政策により武術などに「寒稽古」を採用し士風の刷新を図った。宝暦年間（1751-1763）には、中西派一刀流二代の中西子武は直心影流が考案した防具を着用し「しない」で思い切り打ち込む稽古法を採用し、面・小手・胴などの防具をさらに改良。堅固な四つ割りの竹刀で本気で打ち込める稽古を開始し、竹刀打込試合が可能となり武者修行が始まる。その担い手は武士よりも庶民が先行したようで、文化二年（1805）、幕府が百姓の武芸禁止を通達した文面には「近来在方ニ浪人も杯を留置、百姓共武芸を学ヒ又百姓同志集り、稽古致候も相聞へ候、農業を妨候計ニモ無之、身分をわすれ、気かさニ成行候得は、堅く相止可申候、勿論故なくして武芸師範致候もの杯、猥ニ村方え差置申間敷候」とあり、その実態をみることができる。また、天保九年（1839）農間余業調査の案文には「音曲遊芸指南武芸師範之もの并稽古致候者」とある。これらについて「近世の剣術家たち」（『埼玉人物小百科』埼玉新聞社、昭和58年3月）では「幕末になるにつれて、幕府の支配が

衰え、農民が自己防衛などのために、在村において武芸を習うものが多くでてきたことのうらがえしといえる。これら埼玉の農民に武芸を教えた人々の多くは、甲源一刀流、神道無念流、柳剛流の使い手であった」と指摘している。

1853年のペリー来航から幕末にかけて、勝負を決める試合剣術（競技）が盛んに実施されるようになった。その先鞭をつけたのが、甲源一刀流や神道無念流を名乗る新たな剣士たちであった。剣術はもはや武士階級のみならず地域に密着しリーダーとなっている郷土や名主層をはじめとする庶民が担うものとなり、彼らは武士のような型稽古中心ではなく防具着用の仕合（試合）に重きを置く稽古法によって実力を蓄え、新たな流儀を打ち立てた。特に江戸の後背地に位置する関東一円では多くの流祖が名乗りを上げたと言われる。

甲源一刀流は、埼玉県で天明の飢饉（1783年）における暴徒鎮圧の功績が認められ、弟子を取る事を許された逸見義年（1747-1826）が開いたもの。また同年、農民出身の大橋富吉の敵討ちのために神道無念流二代目宗家戸賀崎熊太郎暉芳（1744-1809）と暉芳の弟子岡田十松吉利（1765-1820）が助太刀をしたことで、戸賀崎道場が江戸市民の間で大いに知られるところとなり、神道無念流が一躍脚光を浴びると、武士や庶民の入門者が続出。この岡田十松吉利（よしとし）は埼玉の志多見の出身で、1783年に師の道場を継ぎ後に神田に撃剣館を開設し藤田東湖、江川太郎左衛門、斎藤弥九郎をはじめ多くの剣士を養成している。

興味深いことに、岡田十松と柳剛流の開祖・岡田惣右衛門奇良とは同い年。幼少のころから文学を志していたという奇良もまた、剣術に関心を持ち江戸に出た。心形刀流の伊庭直保（1708-1752）の高弟大河原右膳有曲に免許皆伝をうけ、その後各地で様々な武術を学び、居合、薙刀、突杖、柔術、当身活法などを総合的に学ぶ剣術に仕上げたという。当時流行していた撃剣界にあり盲点となっていた脚撃ちに妙を得て勝利することによって、世間の注目を浴び一世風靡。実用に徹した奇良は一つ橋家の剣術指南となり、神田お玉が池に道場を開き多くの門弟を育成している。「根をしめて 風にまかす 柳見よ なびく枝には 雪折れもなし」という古歌からヒントを得て、ひそかに柳剛流と名乗ったとされる挿話からは、文学の素養ものぞく。

奇良が学んだ多様な武術の集大成が柳剛流というわけだが、脛打ちに関してはそもそも心形刀流に原型が見て取れる。伊庭是水軒英明（1649-1713）によって1682年創始されたこの流儀は、一刀のみならず、二刀、「抜合」という居合、「枕刀」という薙刀術を含む技法を伝えていた。当然ながら薙刀に特有な脛打ちを実施していたことから、奇良はそれらの技法とそれを駆使するための心法などを忠実に受け継いだ上で、新たな脛撃の妙を工夫したと思われる。ちなみに、伊庭英明は新陰流を学んでいたとも伝えられる。

実のところ新陰流にも脛撃ちがあり、この系統上にある直心影流の「法定（ほうじょう）」という形にも見ることができる。しかし試合では武士の本分である「身を捨てること」を念頭に上段で対しているのも、脛を撃つことは想定しない。そう考えると、柳剛流の特異性は実戦的実用性に徹し撃剣に脛打ちを採用した合理的志向にあるといえまいか。不意打ちをくらった各流儀はこの技法に打ち勝つために難儀した。冒頭に紹介した奇良の一代下の子孫周作もそのひとりで、『剣法秘訣』で以下のような対抗策を講じている。

柳剛流と云ふ剣術は、多く相手の足を打つ流派にして、岡田某の発明にかかるものなり。其の足を打ち来る時、此の方足を揚げんとしては念あり。故におそくして多分打たるものなり。依ってただ我が足のきびすにて、我が尻を蹴ると心得て足を揚ぐれば、念なくして至極早きものなり。又此の方太刀の切先を下げて留めるもよし。これも受け留むと思ふべからず。ただ切先にて板の間、又は土間をたたくと思ふべし。これ又念なくして能く留まるものなり。不断の稽古にても、兎角氣を先々とかくべきことなり。立ち合へば直ぐに突くぞ、打つぞと云ふ氣にならねばならぬなり。受ける、留めると云ふ氣にならぬ様なすべし。

以上の文面からは、柳剛流剣士による何処に仕掛けてくるとも予測不能で容赦のない攻撃に対し、対峙する側の気構え身構えの緊張感がひしひしと伝わる。また、近代剣道の元祖ともいわれる千葉周作がモデルとしたのは柳剛流だったことも垣間見られるのではないか。

家康から託され、武芸としての剣術の型が体系化されるのに四世代。撃剣文化の体系も、戸賀崎暉芳や逸見義年を初代とすれば、第二世代の岡田奇良や岡田十松、第三世代の千葉周作や岡田十内を経て第四世代の山岡鉄舟で整った。

現代剣道の有効打突の要件の冒頭に「充実した氣勢と適正な姿勢」が据えられるようになったのは、あるいは脛打ちの洗礼を受けてのことではなかろうか。剣道の理念である「剣の理法の修練による人間形成の道」に至る心象を、そこに見ることもできよう。

「少年剣道育成強化実践事例」

春日部剣道連盟 団体長 片山 剛

春日部剣道連盟としての小学生を中心とした少年強化事業への取り組みは、この数年来、試行錯誤しながら、ようやく定着してきた感があります。今回は、春日部剣道連盟が年間を通じて実施している、少年少女剣道強化稽古会の取り組みを紹介させていただきます。

1. 沿革

2012年5月より、春日部剣道連盟の加盟団体の一つである春日部剣道会が主催する小中学生を対象とした交流稽古会開催が、少年強化事業の契機となりました。2014年度からは、春日部剣道連盟の各加盟団体（10団体）から小学生強化選手として推薦された選手たちに、この交流稽古会への参加を呼びかけ、春日部剣道連盟の少年強化事業として、2017年度までの4年間、継続実施してきました。2018年度からは、この交流稽古会を正式に春日部剣道連盟主催の「少年少女剣道強化稽古会」と改称し、現在に至っています。

2. 目的

春日部剣道連盟の少年強化事業は、埼玉県剣道連盟が主催する「全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会予選会」および「埼玉県剣道大会 小学生の部」の代表選手選考に際して、単に市内大会等の結果のみではなく、剣道習練の度合いや、剣道に取り組む態度・意欲等を総合的に判断することとし、また、強化稽古会を継続的に実施することで、選手間の交流を深め、春日部剣道連盟チームとしての連帯感、チームワークを醸成することを目的としています。

3. 現在の取り組み

年度初めに、各加盟団体宛に強化稽古会開催を案内し、小学生強化選手を推薦していただき、強化選手として登録します。2019年度（年度当初）は、小学2年生（2名）、小学3年生（8名）、小学4年生（8名）、小学5年生（7名）、小学6年生（12名）、の合計37名を強化選手として登録しました。



2019年 埼玉県剣道大会小学生の部 春日部剣道連盟代表選手団

【強化稽古会の目的】

剣道強化稽古を通じて、地域の少年少女健全育成および剣道振興を目的とする。

また、以下の大会への春日部剣道連盟代表選手選考・選手派遣を行う。

全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会予選会

埼玉県剣道大会（小学生の部）

【稽古内容等】

①対象者：春日部剣道連盟の加盟団体に所属する小学生強化選手

②稽古内容：春日部剣道連盟の少年少女強化計画に基づく稽古を実施する。

③日時場所：土曜日17：00～19：00 春日部市民武道館

年間の強化稽古計画の大枠は、次の通りです。

4月～7月：全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会選手選考および強化稽古

8月～11月：埼玉県剣道大会（小学生の部）選手選考および強化稽古

12月～翌3月：通常稽古

通常稽古の前半は、準備運動、素振りの後、切り返し、打ち込み、基本技、応用技を学年別グループでの周り稽古方式で行い、後半は、参加者や指導者の人数に応じて、地稽古や指導稽古、掛け稽古、切り返し、といった内容で行います。

強化稽古の期間は、通常稽古の内容や時間配分を調整し、学年別の試合練習や、団体戦の試合練習等を取り入れています。

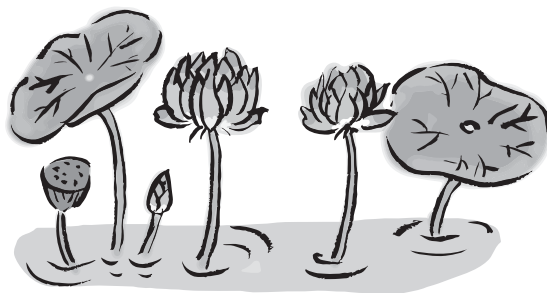
4. 今後の課題

春日部剣道連盟として、先に挙げました2つの予選会・大会での優勝経験はなく、今後の少年強化事業の大きな目標です。

残念ながら、全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会の埼玉県代表小学生チーム、また、埼玉県剣道大会小学生の部において選考された県の小学生強化指定選手の中に春日部剣道連盟の選手は選出されていません。今後の春日部剣道連盟の少年強化事業において、強化稽古計画の改善や実施面での指導体制の充実等により、ひとりでも多くの選手が選出されるようになることが課題です。

5. 少年剣道育成強化の指導を通じての所感

近年の小学生の剣道環境においては、大会・錬成会等の年間試合実施数はとても多くなっていると思います。強化には、勝ちを求めた稽古法も必要ではありますが、同時に、勝敗だけに執着する稽古や指導は、剣道の本来の目的を見失う危険性を感じます。少年剣道の指導者は、勝利至上主義的な考えや態度に陥らないために、細心の注意が必要であり、時として、勝者を戒め、敗者を称える判断力・行動力を持たなくてはなりません。そのために、剣道の理念を正しく理解し実践することが、指導者には求められていると痛切に思います。





吉川剣道連盟

会 長 増田啓三郎／事務局 悦規 俊介



この程連盟紹介の機会をいただき誠にありがとうございます。

埼玉県剣道連盟吉川支部として昭和27年頃に吉川警察署（現三郷市、元吉川町に所在）を中心に発足し、数名での活動でした。昭和40年代に入り吉川警察署管内の吉川市、三郷市、松伏町の各剣道連盟の参入で正式に埼玉県剣道連盟吉川支部として活動が始まりました。

昭和の後半から平成の始めごろまでは大人も含め

小学生、中学生の会員数が多くなり活気がありましたが平成20年代に入ると地域差があるものの徐々に会員数も減少の一途をたどる事になりました。

今では初心者向け剣道教室又は、公共施設等への会員募集の案内提示により少数ですが会員数の増加も見られます。特に小学生の親御さんが一緒に始めるようになり、なお一層稽古場に活気がでてきています。

吉川剣道連盟傘下の吉川市剣道連盟では人口増加もみられ、おかげさまで約200名を超え約半数の100名が中学生、小学生以下でも約80名大人も30名を超えております。

三郷市剣道連盟では大人約100名、小中高校生が減っているため約70名。

松伏町剣道連盟では小中学生約30名、大人約20名と少数ですが奮闘しております。

年に一度の連盟主催の剣道大会のプログラムとして小学生の基本の部、各学年別と中学生高校生一般の男女個人戦を行います。そして、最も好評のイベントとして吉川市に3か所、三郷市に7か所、松伏町に1か所ある剣友会別の対抗戦を小学生と指導者との混合チームを組み、試合をします。各剣友会の応援合戦しながら盛りあがりを見ております。

今後も各剣友会内の団結と相互の親睦を目的に特色ある部門を模索していきます。



令和元年度後期昇段者一覧

剣道 8 段

(11月28日・東京)

城田 雅幸(川越)

剣道 7 段

(8月11日・北海道)

佐久間 洋(熊谷)

(8月17日・長野)

長 大輔(春日部)

原田 至(所沢)

木村 晃(狭山)

松本 光正(東松山)

古屋 俊一(小川)

原田 譲治(川口)

奈良 利昭(朝霞)

宮本 條二(上尾)

福田 克実(高校)

(11月16日・愛知)

稲川 晃(蔵)

(11月27日・東京)

染谷 敏明(杉戸)

高山 偉(久喜)

小川 博孝(行田)

蒲谷 繁一(東入間)

船橋 紀幸(狭山)

吉村 一光(飯能)

栄花 友彦(東松山)

石上 栄一(川口)

狩野 聡(戸田)

児玉 敏夫(深谷)

清水 務(寄居)

宮下 公成(寄居)

大場 千恵(高校)

剣道 6 段

(8月18日・長野)

大橋 一男(越谷)

有川 英子(加須)

小林 拓也(狭山)

林 隆久(入間)

川津 雅勝(川越)

大井 良太(川越)

石井 貴之(東松山)

石山 邦良(東松山)

稲川亜希子(蔵)

和田 進吾(朝霞)

村岡布三佳(浦和)

奈須川伸一(大宮)

五頭 英明(大宮)

岡田 光弘(上尾)

佐々木有美子(北本)

柏葉 靖夫(秩父)

齋藤 達典(警察)

森田 一成(高校)

(8月25日・福岡)

伊谷 俊之(警察)

(11月17日・愛知)

渡辺 雄二(上尾)

竹田 宏樹(高校)

伊与田 毅(高校)

木村 篤史(高校)

(11月26日・東京)

今田 寛之(草加)

柳井 正寿(越谷)

伊東 真照(越谷)

廣田 一尚(越谷)

市橋 千秋(越谷)

横井 一元(春日部)

梶山 正裕(春日部)

本田 貴志(春日部)

澁江 宏之(久喜)

金子 元亮(東入間)

市原 聡(小川)

大森 明彦(川口)

中西 康太(朝霞)

近藤 英隆(浦和)

中野 卓夫(浦和)

小谷 勇人(上尾)

坂田 卓也(北本)

大野 陽一(熊谷)

橋本 剛(熊谷)

染野 大介(本庄)

藤澤 洋一(秩父)

小野寺弘明(警察)

海保 徹(警察)

金野 裕二(高校)

剣道 5 段

(7月7日・大宮)

久保 匡之(草加)

若松 忠(草加)

中濱 千尋(越谷)

中山 幸夫(久喜)

高井 悟(行田)

安田 宏輝(所沢)

藤原 廣行(狭山)

木下 裕太(入間)

野村 和則(入間)

長須 智恵(川越)

西村 幸生(東松山)

近藤 淑記(東松山)

鈴木 克則(東松山)

森田 聡(東松山)

青木 邦仁(川口)

本田 智宏(蔵)

栗田 圭(朝霞)

上原 孝(朝霞)

井浦 秀真(浦和)

小池 悠太(大宮)

高橋 遼(大宮)

関口 郁子(大宮)

塩野祐希子(上尾)

藤代 翔(鴻巣)

岩田 真行(熊谷)

加藤 正行(熊谷)

岡本 正利(警察)

(11月4日・県立武道館)

川端 康子(草加)

野本めぐみ(草加)

小井 将司(越谷)

小沼 呂爾(越谷)

梅田 治彦(春日部)

小山 聡美(久喜)

工藤 忠良(行田)

黒木 敏之(所沢)

柴田 知幸(所沢)

平岡 学(所沢)

坂山 知子(東入間)

山崎 夏樹(東入間)

大井 正宏(東入間)

三嶋 伸也(川越)

大崎 昭彦(飯能)

永井 雄輔(西入間)

青柳 克彦(西入間)

佐藤 惟(東松山)

松井 秀之(川口)

石内 政志(川口)

荻島 幸藏(戸田)

川上 順子(戸田)

児嶋 眞子(朝霞)

金澤 紗瑛(浦和)

藤村 進(浦和)

和田 亮(浦和)

齊藤 耕(浦和)

関 航太(大宮)

吉岡 将輝(大宮)

小此木裕二(大宮)

小山 望海(大宮)

中島 悠介(大宮)

塚越 貴紀(大宮)

埜口 一生(大宮)

永野 雅大(北本)

小田 直城(熊谷)

渡邊 美和(熊谷)

富 博康(熊谷)

堀口 英夫(本庄)

竹内慎太郎(警察)

富田 晋仁(警察)

剣道 4 段

(7月7日・大宮)

大井 直人(草加)

甲斐 元揮(越谷)

野中孝次郎(越谷)

大澤 良郎(越谷)

望月 彩芽(越谷)

浦野 聖子(杉戸)

石井菜美子(羽生)

坂本 邦拓(所沢)

須田 知恵(所沢)

渋谷 敦(東入間)

福田 匡晃(狭山)

鴨下 怜弥(入間)

有田 尚輝(入間)

柳澤 司(川越)

瀬田 裕士(川越)

駒井 仁(飯能)

片山 義三(西入間)

山野 仰厚(東松山)

佐土原京也(川口)

八谷 玲(川口)

宇田川航平(川口)

犬塚 慶一(川口)

伊藤 勝也(川口)

友安 孝之(川口)

中山 善夫(川口)

松本 遼(朝霞)

加藤 雅也(朝霞)

藤本 一真(朝霞)

吉岡 康範(朝霞)

大林 翔大(浦和)

金森 立樹(浦和)

熊木 敬治(浦和)

北村 成一(浦和)

越智 昂平(大宮)

高橋 鯨丞(大宮)

五頭 亮太(大宮)

春木 裕成(大宮)

大浦 眞吾(大宮)

千葉 翔太(上尾)

田村 祐一(上尾)

泉 英太(北本)

土性 佳晴(北本)

細見 俊明(深谷)

横田 尚之(警察)

大熊 優吾(警察)

黒沢 悠太(警察)

逸見 光(警察)

大森 文夫(警察)

高崎 幹望(警察)

小淵 志晟(大学)

川島 一朗(大学)

風間 颯(大学)

小野寺 貫(大学)

大塚 弘惟(大学)

植野祈良光(大学)

(11月4日・県立武道館)

小谷 美佳(草加)

昼間 良次(草加)

茅野 宏信(越谷)

小島 彩楓(越谷)

石川 雄三(越谷)

渡辺 展(吉川)

矢敷 修造(吉川)

吉田 和人(春日部)

宮本 賢治(春日部)

新谷 怜大(春日部)

田口 岩三(春日部)

二木 哲平(春日部)

柏倉 拓(春日部)

杉長 彬(久喜)

相澤 竜也(久喜)

大野 雄大(久喜)

竹内 太一(所沢)

有賀 恭子(所沢)

浪山富美子(所沢)

小巻 正幸(東入間)

早坂 修一(東入間)

高野 真弓(東入間)

加藤 明子(川越)

川崎 和司(飯能)

小林日南乃(東松山)

武藤 郁子(東松山)

山本 二葉(川口)

秋山 貴寛(川口)

大坪 一樹(朝霞)

関口 大輝(浦和)

内海 慎吾(浦和)

武笠 良司(浦和)

小宮 健史(大宮)

森 伸一(大宮)

大湊 菜々(大宮)

南 勝也(大宮)

蓮見 紀子(大宮)

池田丈太郎(上尾)

山口日出明(鴻巣)

新島 陣(北本)

亀井萌々香(本庄)

齋藤 洋平(本庄)

吉川 博明(秩父)

安倍 大稀(警察)

橋本 宗典(警察)

小林 大希(警察)

大八木 塁(警察)

東海林伸成(警察)

保坂 優心(警察)

高野 季也(高校)

渡部 文弘(高校)

岸田 耀(大学)

玉田 凌也(大学)

近藤 祐太(大学)

栗本 祥希(大学)

黒澤 斗葵(大学)

根岸 達也(大学)

佐藤 涼(大学)

三浦駿太郎(大学)

三阪 龍輝(大学)

小泉 滯(大学)

清水 柊人(大学)

西田 司(大学)

千葉 広大(大学)

川之上